

## 令和7年度 阿南第二中学校 学校評価総括

### 1 調査の概要

#### (1) 回答者

生徒100名(84.7%)、保護者84名(回収率71.2%)、教職員16名(100%)

#### (2) 回答方式

生徒24項目、保護者18項目、教職員37項目（そのうち3項目で記述式）でアンケートを行った。生徒、保護者、教職員の実施方法は、Googleフォームを活用してweb上でのアンケートを実施。web上でのアンケートの結果、回収率は70%以上であったが課題が考えられるため、実施方法の検討や啓発の仕方の工夫等を検討する必要がある。

それぞれの質問項目に対して4段階で評価し、「そう思う」「ほぼそう思う」を肯定的意見、「あまり思わない」「思わない」を否定的意見として、調査結果を分析しグラフ化した。

【肯定的意見】	A：そう思う	B：ほぼそう思う
【否定的意見】	C：あまり思わない	D：思わない

#### (3) 結果の活用

調査結果については、保護者、教職員全員に配布し、昨年度の結果と比較するなど校内で共有を図り、次年度の教育活動に生かすことにしている。また、アンケート結果は当校ホームページ上で公表する予定である。

### 2 調査結果の分析と今後の方向性の検討

#### (1) 【学校での学習活動や家庭での学習習慣に関すること】

##### 調査結果

「自分はまじめに授業を受けている」生徒は95%、「子どもは授業に対して前向きに取り組んでいる」とする保護者の割合は79%である。二中学生は学校での学習に対する姿勢については非常に前向きである。また、教職員からは「生徒は学習意欲をもち、自ら学んでいる」という項目で100%の回答を得ている。以前から課題であった家庭学習については、「子どもは家庭学習によく取り組んでいる」とする保護者は73%から78%へ2年連続微増であったが一転し、52%という大幅減という結果となった。

##### 分析と今後の方向性の検討

この結果を受け、今後は、子どもが「やらされる学習」ではなく「自分から取り組める学習」へと転換していくことが重要課題であると捉える。

具体的には、まず三者面談や学年だより等で、家庭学習の目的や意義を保護者に分かりやすく丁寧に伝え、家庭での声かけの仕方や学習環境づくりについて具体例を示しながら協力を仰ぐ。例えば「量」ではなく「時間や質」を意識すること、「達成感」を重視した課題設定にし、短時間でも取り組めたことを評価する仕組みを整えること等を学力向上担当と連携して構築していく。また、子どもの興味・関心に応じて選択できる課題や、生活と結び付いた学習（調べ学習、日記、体験の振り返りなど）を取り入れることで、学習への主体性を高めていく。

#### (2) 【望ましい友人関係づくりや思いやりのある学校づくりに関すること】

##### 調査結果

「自分は友だちを大切に思いやりをもって生活できている」生徒は昨年同様に97

%であった。しかしながら、「中学生は思いやりがあり、楽しい学校生活が過ごせている」に関して否定的な意見は昨年度の4%から9%に増加しており、さらに「子どもは学校へ行くのを楽しみにしている」に関する否定的な意見の保護者が、昨年度の12%から16%と微増で一昨年同様の結果となった。

#### 分析と今後の方向性の検討

生徒自身の自己評価では「友だちを大切に、思いやりをもって生活できている」と感じている割合が97%と高水準を維持していることから、個々の生徒の意識や価値観としての思いやりは十分に育っていると捉えることができる。一方で、「中学生は思いやりがあり、楽しい学校生活が過ごせている」とする学校全体への評価や、「学校へ行くのを楽しみにしている」とする保護者の見方では、否定的な意見が増加しており、個人の意識と集団としての実感との間にずれが生じていることが課題として浮かび上がっている。

この背景には、友人関係のトラブルの見えにくさ、集団の中での一部の言動が学校全体の雰囲気に影響を与えている可能性、また保護者が子どもの様子を通して不安を感じ取っていることなどが考えられる。特に、少数であっても否定的な体験が強く印象に残ることで、「楽しい学校」という評価を下げている可能性がある。

今後は、これまでの人権学習、「花」活動で得た経験や思いやりの意識を、学級・学年・学校全体の安心感や楽しさとして実感できる取組へとつなげていくことが重要である。具体的には、日常の学校生活の中で互いを認め合う場面を意図的に設定し、対話や協働活動を通して人間関係を深めるとともに、生徒指導委員会やいじめ防止委員会等と連携していじめや人間関係の小さな不安を早期に把握し、丁寧に対応する体制を今以上に強化する。また、学校の取組や生徒の前向きな姿を積極的に発信し、保護者と共有することで、学校生活への安心感や信頼感を高めていくことも必要である。

### **(3)【規範意識や規律のある学校生活に関すること】**

#### 調査結果

「規則ややるべきこと（清掃や係）」などに関してほぼ100%の生徒ができていると回答し、教職員も「清掃などやるべきこと」「挨拶」に関して肯定的意見がおよそ90%を占めている。

#### 分析と今後の方向性の検討

昨年度同様、生徒の規範意識は概ね良好であり、今後とも、挨拶・学習ルール・集団活動・清掃などの具体的な指導を通して、さらに規範意識を高め、生徒一人一人に応じた丁寧な指導を継続して実践していく。

### **(4)【教職員に対する信頼に関すること】**

#### 調査結果

「先生は生徒の能力や努力を適切に評価してくれる」に関して肯定的な生徒が昨年度より3%増の96%であった。また、保護者アンケートの「子どものことについて適切に相談に応じてくれる先生がいる」「いじめや暴力のない学校作りに取り組んでいる」「子どもの能力や努力を適切・公平に評価してくれる」の3項目に関して肯定的に考える保護者も88%から95%と、昨年よりも増加している。

#### 分析と今後の方向性の検討

この結果を受け、授業時数が多く忙しい中でも、日頃の授業や評価において、生徒一人一人の取組や成長を丁寧に見取り、分かりやすく伝えてきた教職員の取組の成果であると捉えられる。今後も公正で納得感のある評価を継続し、生徒の学習意欲や自己肯定感の向上につなげていく必要がある。また、部活動や休み時間も含めて、先生方が生徒と共に過ごし、生徒のことをよく見ていることがよくわかる結果となっている。

しかし、それぞれの項目において否定的な保護者が1から3%いるという点を意識して取り組ん

でいく必要がある。目立たない生徒やなかなか声を発することのできない生徒の思いも大切にしてい、どの生徒もとこぼさない教育の実践を心がけていく。

## (5)【授業に関すること】

### 調査結果

「授業に工夫をこらしてわかりやすい授業を行っている」「各教科において、基礎・基本を明確にし、教材の精選・工夫を行っている」について、ともに教職員の割合が昨年度同様の100%となった。「思考力を重視した問題解決的な学習を行っている」教職員の割合は昨年度の9割から大幅減の75%となった。また、「授業はわかりやすくよく理解できる」生徒の割合は89%となり、「ICTを活用した教育によって授業がわかりやすくなった」項目について、肯定的な意見の生徒の割合が、85%である。一方、教職員の「授業が理解できなかった生徒に対してフォローを行っている」割合が、昨年度の87%から81%と若干減少となった。「到達度の低い生徒に対する学習指導を、学校全体の課題として取り組んでいる」の肯定的意見は、44%と大幅に減少している。

### 分析と今後の方向性の検討

それぞれの学年の実態を踏まえて、基礎学力の向上と言うよりも基礎学力の定着を図った結果であると捉える。また、授業者がより効果的な活動を研究して取り入れ、授業内容の工夫に取り組んできたことで、教職員の意識と生徒の実感が概ね一致してきたことは成果といえる。

「授業が理解できなかった生徒に対してフォローを行っている」と回答した職員の割合が依然として高い水準を保っているものの、昨年度からはやや減少している点は、個々の教員による対応には限界が生じつつあることの表れと捉えられる。また、「到達度の低い生徒に対する学習指導を学校全体の課題として取り組んでいる」とする肯定的意見が44%と大幅に減少していることから、支援が個人対応にとどまり、組織的・共通的な取組として十分に機能していないという認識が職員間に広がっていることが課題として浮き彫りになっている。この結果は、フォロー自体は各教員が努力して行っているものの、指導方法や支援の在り方が学年・教科・個人に委ねられ、学校としての共通理解や仕組みが十分に整っていないことを示唆している。また、業務の多忙化により、情報共有や協議の時間が確保しにくくなっていることも、学校全体で課題として捉えにくくなっている要因と考えられる。

今後は、到達度の低い生徒への支援を「個々の努力」から「学校全体の取組」へと転換する必要がある。生徒のつまづきを共通の指標で把握し、指導方法や支援策を共有・協議する体制を整えるとともに、T.Tや補充学習、ICTの活用などを組織的に位置付けることで、基礎・基本の確実な定着と向上につなげていく。

## (6)【学校行事に関すること】

### 調査結果

生徒の90%、保護者の80%が「学校行事はよく工夫され、参加するのが楽しい」と肯定的に捉えており、また、保護者の95%が「学校行事の種類・頻度は適正である」と回答している。一方で、教職員の81%が「学校行事の種類・頻度は適正ではない」と否定的な回答が多数を占めている。

### 分析と今後の方向性の検討

このことから、総合的に考えると、学校行事に対する評価が、立場によって大きく異なっていることが明確である。

まず、生徒や保護者からは、学校行事が教育的効果や満足感の面で高く評価されていることが分かる。外部から見た学校行事は過不足なく、妥当なものとして受け止められているようである。

しかしながら、教職員の多数が「学校行事の種類・頻度は適正である」において否定的に捉えている点は大きな課題であるといえる。これは、行事そのものの価値や成果が否定されているというよりも、準備・運営に伴う業務負担の大きさや時間的余裕のなさ、行事が重なることによる授業との両立の難しさに対する問題意識の表れと捉えられる。すなわち、行事は生徒や保護者に

としては充実している一方で、その裏側を支える教職員には過重感が生じているという構図が見えてくる。

以上から、学校行事は教育的意義や満足度の面では一定の成果を上げているものの、持続可能な学校運営という観点では再検討が必要な段階にあると分析できる。今後は、行事の目的や優先順位を改めて整理し、精選・統合・時期の見直し等を検討するとともに、業務分担の工夫や外部人材・ICTの活用などにより、教職員の負担軽減を図りながら質の高い学校行事を維持していくことを推進していかなければならない。

## (7)【部活動に関すること】

### 調査結果

「部活動に積極的に参加している」と回答した生徒が93%から70%へ大きく減少している。また、「部活動と学習の両立」に関しては、生徒の31%が「両立できていない」と感じており、教職員においても否定的な意見が昨年度同様に約2割存在している。しかしその一方で、保護者の91%が「部活動は適正に運営されている」と肯定的に捉えている。

### 分析と今後の方向性の検討

今回の結果を全体的に捉えてみると、「部活動に積極的に参加している」に関しては、部活動への関わり方が変化していると考えられる。活動時間や日数の見直し、地域移行や合同チームが増えていること、それによって生じる生徒や保護者の部活動に対する思いの変化、学習塾や家庭での時間確保を重視する生徒の増加など様々な要因が考えられ、生徒が部活動との距離感や心の持ち方などを調整している可能性も考えられる。また、「部活動と学習の両立」に関しては、運営面では改善が進んでいる一方で、個々の生徒の生活リズムや学習習慣の確立という点では、なお課題が残っていることを示している。特に、学習時間の確保や疲労の蓄積、自己管理能力の差が、両立の難しさにつながっていると考えられる。保護者へは、部活動の方針や運営改善については理解と支持が広がっているといえる。これは、活動時間の適正化や安全面への配慮、学校からの丁寧な説明が一定の成果を上げている結果と捉えられる。

以上を踏まえると、部活動は「運営の適正化」と「理解の広がり」という面では前進しているものの、生徒一人一人が無理なく参加し、学習とのバランスを保っているかという質の部分に課題が移行している段階にあると分析できる。今後は、学習計画の立て方や時間管理に関する指導を充実させ、生徒自身が主体的に部活動と学習を両立できるよう運営をしなければならない。

## (8)【開かれた学校づくりに関すること】

### 調査結果

保護者アンケートにおいて「学校のPTA活動は充実している」に否定的な意見をもつ保護者が、昨年度の20%から本年度は19%と、過去3年引き続き減少傾向にある。

### 分析と今後の方向性の検討

PTA活動に対して、学校からの継続的で具体的な情報発信が、保護者の学校理解や信頼感の醸成につながっていると捉えることができる。

例えば、本年度も学校長からの「二中だより」を通して、生徒の日常の活動の様子や学校からのお知らせを、時事的な話題を交えながら継続的に発信し、生徒の活動写真や個々の意見・感想を多く掲載することで、学校生活が具体的に伝わる工夫がなされてきた。その結果、保護者が学校の取組や教育活動を身近に感じ、学校運営について一定の理解を得られていることが、アンケート結果にも表れていると考えられる。一方で、依然として約2割の保護者が否定的な見方をしていることから、活動内容や参加方法が一部の保護者にとっては分かりにくい、あるいは負担感を伴って受け止められている可能性も示唆される。

以上から、情報発信の取組は一定の成果を上げているものの、今後はPTA活動の目的や成果、参加のしやすさについて、さらに丁寧な説明や工夫を重ねることで、より多くの保護者が「参画しやすく、意義を実感できるPTA活動」と感じられるよう、改善していく必要があると考えられる。